

町工場と親族ネットワーク

長 坂 格
新潟国際情報大学

Die Cutting Industry and Kinship Networks in Metro Manila

NAGASAKA Itaru

1 制度と行為主体

本稿の目的は、フィリピン、ルソン島北西部のイロコス地方の1つの町出身者が、家族・親族のネットワークを援用することによって首都圏の印刷関連産業に集中的に参入し、多数の工場を設立した過程を、本論集全体を貫く「行為主体と制度」という問題設定との関連において、現地調査¹によって得られた資料に基づき明らかにすることである。まず、本研究プロジェクトの鍵概念として設定された「行為主体と制度」について、文化人類学の観点からの若干の整理を行っておきたい。

最初に「制度」という概念の文化／社会人類学（以下人類学）の中での使われ方、ないしは概念規定をごく簡単にみておこう。リーチも述べるように、制度という語は「社会人類学者の著述に頻繁に登場するが、その使われ方はひじょうに多様である」[1985: 295]。ここでは人類学の中で制度概念が特に重要な位置づけをもっていた構造機能主義人類学における制度概念について概観しておきたい。

ラドクリフ＝ブラウンは、制度概念を次のように説明している。

社会生活のある特定形態の行為について確立されている規範を指して通常、制度（institution）という。制度は区別することのできる社会集団、あるいはクラスによって、そのようなものであると認められている行為についての確立した規範である [ラドクリフ＝ブラウン 1975: 18]

こうした個人を拘束する規範としての制度の捉え方は、構造機能主義人類学における、制

¹ 現地調査は2001年11月、2002年8月にマニラ首都圏において実施された。このうち2002年度の調査は、科学研究費補助金・基盤研究A「東南アジア地方都市における都市化とエスニシティ形成の社会人類学的研究」（研究代表者・合田瀧神戸大学教授）の助成を受けた。また出身地であるイロコス地方の村落調査、海外移住先であるイタリア調査では、それぞれ松下国際財団・博士課程研究助成（1996年度）、科学研究費補助金・奨励研究A（2001年度）の助成を受けた。

度概念が持つ重要な位置を示している。構造機能主義人類学は、社会関係の配置としての社会構造及びその持続を考察の中心とする。そこにおいては、個人が他の人で行う相互行為は規範によって統制されているとされる。そしてそうした相互行為を律する規範としての制度は、他の制度と関連を持ちながら、全体としての社会構造の存続への機能を持つことになる。このようにこの立場からみれば、ある社会における家族、宗教、教育などの諸制度の解明が、社会構造及び社会構造の持続の理解のためには不可欠となっていたことがわかるであろう。

このような構造機能主義人類学における規範としての社会制度への着目は、親族研究における「出自理論」を人類学にもたらすなど、人類学が固有の学問領域として「制度化」されることに一定の役割を果たしてきた [cf. 瀬川 1997: 36 - 41]。しかし同時にそのような立場は、「個人よりもそれが属する集団が、そして集団よりもそれによって構成される社会全体が何よりも重要な位置を占める」[田中 1998: 85] ことを意味し、諸制度の中での個人の行為を軽視することにつながることで、そこで用いられる当該社会内部の社会制度に分析の中心をおく手法は、諸制度が置かれたより大きな構造的条件を軽視することにつながることで、という二つの点で批判を受けることになった。

第一の点については、まずオートナーによる「実践理論」[cf. Ortner 1984] という観点からの機能主義、構造主義、マルクス主義以降の人類学の研究動向の整理をみておきたい。

実践理論とは、従来の構造決定論 パーソンズのシステム論及び関連する機能主義、レヴィ=ストロースの構造主義、ある種の機械的なマルクス主義 への様々な理論的対応の一つを代表している。実践という枠組みにおいては、従来の構造決定モデルにおけるのと同様に、人間の行為が所与の社会的文化的秩序（しばしば「構造」の用語によって要約される）によって制限されているということもあるが、しかし人間の行為は「構造」を作る それを再生産するか、変えるか、あるいはその両方 ということもあるとされるのである。（強調は原文）[Ortner 1996:2]

ここで述べられていることを、上述の第一の批判点に即して述べるならば次のようになる。行為を律する規範としての制度を見ることによって社会構造を解明していく構造機能主義の立場を忠実に推し進めるならば、人間の行為は、その個人の構造の中での位置によって方向付けられるとされ、さらに規範の遵守を通して全体としての社会構造の存続に寄与するものとして分析されることになる。しかしそうした立場においては、人間の行為が、微妙なズレを含みながら構造を再生産していく過程は分析の射程に入っていない。

このような見方に従うならば、本プロジェクトのもう一つの鍵概念である「行為主体」（agency）は、構造機能主義の立場において軽視されてきた人間の行為を、社会・文化の分析の中に取り込むことを可能にする概念として位置づけることができるだろう。すなわち、構造の産物であり、また同時に構造を再生産し、時に変えていく担い手でもある

「行為主体」概念を用いることによって、オートナーが述べるように、構造決定論に陥らず、なおかつ「行為主体」を種々の構造から自由な個人とみなしがちな「主意主義」(voluntarism)にも陥らずに、構造機能主義などが軽視してきた諸個人の行為を分析の射程に収めることが可能になるといえるのである [Ortner 1996:7]。ここでは、こうした立場を、本研究プロジェクトの概念を用いて便宜的に「制度の中の行為主体への着目」として表現しておこう。

次に、構造機能主義的な人類学的研究が、当該社会の社会制度をあたかも外部からの影響がなかったように扱うという手法への批判に、簡単な説明を加えておこう。まず指摘しておかなくてはならないのは、こうした批判が、これまで人類学では繰り返し言及されてきているということである。例えばマリノフスキーは、すでに1930年前後に、同時代の多くの人類学者が風変わりな習慣などに興味を示す「骨董趣味的」(antiquarian)制度研究に陥っていることを批判し、「現代」の「未開社会」を、植民地状況下の変化の相において捉えることを提唱していた [合田 1997:10; 清水 1999]。

ただし、こうした批判への取り組みが人類学的研究の主題として浮上するのは1960年代以降のことであった。とりわけ、「農民社会」研究から展開し、後にポリティカルエコノミーと呼ばれるようになる研究動向は、1960年代以前から「対象社会」を孤立した状態として捉えることの限界を認識し、国家や都市というより大きな構造的条件との関係のうち捉える試みを行っていた [Roseberry 1988: cf. Ortner 1984]。例えばウルフによるラテンアメリカの共同体研究においては、農民社会のタイポロジーが、その農民社会が外部社会にいかにか統合されてきたかという観点から論じられている [Wolf 1955: cf. Wolf 1988]。

こうした研究は、構造機能主義におけるような、社会を自律した単位として切り取り、その内部の社会制度を記述分析していく手法が内包する問題点を的確に示している。すなわち、人類学者が実際に調査によって得られた資料から再構成してきた社会制度は、労働移動や行政制度の拡充など、すでに世界規模に拡大した資本主義経済や植民地支配の影響から決して自律して存在してきたわけではないのであるが、理論的関心を優先させそのように便宜的に扱ってきたという問題点である。この点を踏まえれば、これまで再三指摘されてきたように、現地調査を通じてのミクロな観察と分析は、こうしたマクロレベルの歴史的・政治的・経済的条件の中に位置づけられ必要があるということがわかる。ここでは、こうした指摘を、本研究プロジェクトの鍵概念を用いて「制度が含まれる構造的条件への着目」の必要性として表現しておきたい。

2 何を制度とするか？

以上の「制度」と「行為主体」という鍵概念を用いた問題点の整理を踏まえ、次に本稿

が取り上げる「制度」を具体的に説明しておこう。本稿が「制度」として取り上げるのは、調査対象となったマニラ首都圏で働く人々の出身地であるイロコス地方の村落社会の家族・親族関係を中核とする社会関係の枠組みである。ついてはまず、イロコス地方の村落社会における社会生活において最も重要であると筆者が考えているイロカノ語の *awan sabsabali* という概念をみておきたい。

Awan sabsabali という言葉は、～がないという意味で頻繁に用いられる *awan* と、名詞として他人、他のもの、別のもの、あるいは形容詞として異なっている、別個の、などを意味する *sabali* という単語の組み合わせからなっている。社会的範疇としての *sabali* という概念は、親族に対する非親族、我々に対する彼ら、人間に対する「人間のようでないもの *di katatawan*」というように自己を中心とした一定の広がり外の外にいる人々、あるいはローカルに概念化された諸精霊をさす。逆に *awan sabsabali* とは、こうした広がりの中にある人々を指す概念である。

この *awan sabsabali* という概念を理解するにあたって重要なのは、その範囲が流動的可変的であるという点、そして *awan sabsabali* の関係にある人々同士では相互扶助が期待されるという点である。*Awan sabsabali* の範囲について人々に尋ねると、「近い親族関係にある者」、「親族関係にある者全て」、「親族でなくても近しい関係にあれば *awan sabsabali* となる」、という具合に様々な答えが返ってくるが、このことはこの概念がその範囲を状況に応じて伸縮させるという特徴をよく示している。

また *awan sabsabali* とされた人々同士に期待されるのは、互いに助け合う *agtitinnulong* ことである。この相互扶助という言葉の語根となっている *tulong* は、通常 *help* と訳されるが、*awan sabsabali* との関連で用いられる場合、打算のない援助・支援という側面が強調される。例えば筆者が行った海外移住者達の子供たちの出身地における近親者による養育に関する調査では、次のようなフレーズが人々への聞き取りの中で頻繁に聞かれた。「給料 *sweldo* なんてもらっていない。だって私達は *awan sabsabali* だから。助けた *tulong* だけだ。」「取り決め *tulag* などしていない。だって私達は *awan sabsabali* だから。」つまり、*sabali* とされる外部の存在との関係とは異なり、*awan sabsabali* とされる人々同士の関係においては、給料 *sweldo* や契約ないしは取り決め *tulag* という概念は介在するべきではなく、打算のない援助 *tulong* が期待されるということである。

こうした自己を中心とした可変的な範囲を持ち、さらにその関係同士にある人々に打算のない相互扶助が求められる *awan sabsabali* という概念は、イロカノ語で「親族」を指す *kabagian* という概念と重なり合う部分が多い。イロカノ語の *kabagian* (以下、便宜的に親族と表記する) という概念は、人類学の分析概念を用いるならば、自己を中心として「非親族」に至るまでの放射状の広がりである双方向的キンドレッドとなる。通常、第三イトコまでが親族の範囲であるとされるが、こうした自己を中心に拡大する親族の境界は明確ではなく、「親族関係を辿ることができる限り」と言われたり、政治的経済的利害、

居住などの個別的諸条件によってその範囲が選択的に拡大されたりする² [cf. 玉置 1982: 268 - 9]。図式的に言えば、*sabali*にいたるまでの自己を中心とする広がり、特に *awan sabsabali*として相互扶助が期待される親族 *kabagian*ないしは近親 *asidig a bagi* から、他人、あるいは諸精霊に至る同心円として想像されているということが出来る [cf. Pertierra 1988:77]

さて、こうした親族関係が中核となる *awan sabsabali*の柔軟性・可塑性とそうした関係にある者同士の打算のない援助の期待という社会関係の枠組みは、村落社会の人々の日常生活に大きな意味をもつ。筆者の調査においても、親族間や近隣の者同士の様々な形での援助が「私たちは *awan sabsabali*だから」という言葉で説明され、また、人々の日常生活や緊急時の様々の援助行為を方向付けている状況が観察された。

本稿が関心を寄せる移住過程においても、*awan sabsabali*とされる人々同士の、とりわけ遠近様々な親族間の援助関係を容易に見出すことができる。実際、従来のフィリピンあるいはイロコス地方からの農村都市移住、海外移住の研究においては、移住過程において親族関係が援用される点が着目されてきた [Caces et al. 1985; Caces 1985; Nagasaka 1998; Pertierra 1992; SyCip and Fawcett 1988; Trager 1988] これらの研究は、移住現象を個人の合理的な意思決定の集積とみなす均衡論、あるいはマクロレベルの政治経済構造の産物とみなす歴史構造論という移住研究における2つの対立するアプローチ³が共に軽視してきた、移住の社会的過程としての側面の把握を可能にするという理論的意義をもつと同時に、イロコス地方あるいはフィリピンからのノにおける移住過程の特徴を的確に捉えてきたということができる。

本稿も基本的にはこうした家族・親族のネットワークに着目する。しかしその際、「制度」と「行為主体」という鍵概念から提起した二つの視座、すなわち「制度の中の行為主体への着目」と「制度が含まれる構造的条件への着目」を踏まえ、次の二点に注意しつつ記述分析を行っていく。

一つは、移住過程における親族関係の枠組みの運用を、調和的かつ一方向的な過程としてのみ描かないことである。*awan sabsabali*の関係にある人同士の間では打算のない相互扶助が期待されるという言説は、人々の行為をある程度方向付ける。しかし同時に *awan sabsabali*という関係性の枠自体が可変的であるため、誰が自分にとっての *awan sabsabali*であるか自体が争われることもあるし、さらには *awan sabsabali*の間の支援 *tulong*とは対立するような価値を含んだ言説が持ち出され、支援をどの程度まで行うかが

2 親族関係の認知は、詳しい系譜関係に関する知識がなくても可能である。例えば、親世代のイトコ *kasinsin*関係が子世代でも引き続き認知される(親同士がイトコと呼び合っていたから我々もイトコであるなど)。「我々は *puon* (根茎を意味する)を共有する」という言説によって親族関係の存在が認知される、姓と出身地の一致から親族関係の存在が認知される、などである。

3 二つの対立するアプローチという点は、Wood [1982] 参照。

問われることもある。つまり *awan sabsabali* という関係にある人々同士の諸行為自体、人々の駆け引き交渉が行われるアリーナとなっているのであり、そうした駆け引き交渉の検討なしに移住過程におけるネットワークを描くことは、移住過程を過度に単調なものとして描くことになるだろう。

もう一つは、移住過程において援用される親族のネットワークをより大きな構造的条件の中に位置づけることである。従来の移住研究においては、親族のネットワークの移住過程における様々なコストやリスクを低減する機能が指摘されてきた [Massey et al. 1993]。しかし、そうした移住者の家族・親族のネットワーク自体が、出身地社会において歴史的に形成された家族・親族関係の枠組みと、それを取り巻く政治経済的諸条件との相互交差にうちに、その都度形成されていくものであるという点はさほど注目されてこなかった [長坂 2003; cf. Gurak and Caces 1992:160; Guarnizo and Smith 1999:13]。本稿ではこの点を踏まえ、イロコス地方の村落社会における社会関係の枠組みをある程度内在化してきた諸個人が、特定の歴史的状況における政治経済的条件の中で、いかに特定の親族ネットワークを形成してきたかを記述分析していきたい。

3 調査村の移住史概略

具体的な調査事例の記述に入る前に、まず筆者が1993年以来、断続的に調査を続けているイロコス地方の1村の移住史をみておきたい。調査時点(1998年)の調査村S村の人口、世帯数は、それぞれ533人、130世帯であった。一部の公務員などの給与所得者を除く生計手段としては、稲作、乾季のタバコ栽培が中心であり、国内外から送金を受けている世帯、年金収入がある世帯も少なくない。

表1は、世帯調査や移住者への経験の個別の聞き取りの際に、S村からの移住者として名前が挙げられた者の行き先、移住年をまとめた移住者リストを、移住先別、年代別に集計したものである。一人の村人が複数の地域に移動している場合は、それぞれの移住先に算入している。

まず調査方法から生じるこの表の資料としての限界について記しておこう。世帯調査の際は、世帯主夫婦(S村出身者の場合)、さらにはその親世代のキョウダイの氏名と現住所を聞き出し、イロコス地方の外に居住していれば移住年を聞くという形で情報を得た。ただし、キョウダイそれぞれの全ての移住史を聞き取っているわけではないので、キョウダイが複数の地域に移住した経験を持っている場合、現在の居住地に移住する以前の移住経験は基本的に反映されていない。さらにこの調査方法では、キョウダイが誰もS村に残っていないS村からの移住者達は、この表に含まれてこない。

イロコス地方で盛んに行われた独立以前のカリフォルニア、ハワイへの移住については、

村の歴史を把握するために老齢の村人に別に聞き取りを行っているため、当時の移住状況についてはほぼ把握できたと思われる。しかし同時期の国内移動については同様の聞き取りは行われていないため、実際の独立以前の国内各地への移住者数は表中の数字よりも大きかったと予想される。また、1970年代にイロコス进行调查した Young が指摘するように、独立以前の国内移住については、どこの村人がいつ頃ハワイへ行ったことなどと比較すると村人たちの記憶があいまいであるという事情も、こうした低い数値に関係していると考えられる [cf. Young 1980:193]。ただし、様々な機会に行われた聞き取りなどで、S村からの移住者として新たに名前が出た場合は、適宜移住者リストに名前を記していったことも付け加えておきたい。

表1 S村からの移住の概要

	ハワイ		その他の米國		イタリア		香港		サウジアラビア		シンガポール		台湾		クウェート		その他海外		
	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	
～1920	1		1																
1921～30	7		3																
1931～40			2																
1941～50																			
1951～60			1																
1961～70		1	5	3															1
1971～80	8	7	6	8		2		1		1									
1981～90	4	7	3	3	17	31		4	1		1	4							3
1991～00	14	5	0	3	16	18		5	1	2		1	2	6	2	1			3
45年以前年不詳	13		1																
45年以降年不詳	4	7		3	1													1	
合計	51	27	22	20	34	51	0	10	2	3	1	5	2	6	2	2	0	7	

	マニラ		ミンダナオ		バギオ		ラグナ		イサベラ・カガヤン		その他国内	
	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F
～1920												
1921～30												
1931～40			4	4					2			
1941～50	2	3	3				1	3		2		
1951～60	3	4	4					3	1	2		
1961～70	13	13		1		1	2	2	1	1		
1971～80	16	7	1		1				2	2	2	
1981～90	13	9			2	1	1		4	1		
1991～00	16	16			6	4						
45年以前年不詳			3									
45年以降年不詳	6	10	1	4		1			1	1		
合計	69	66	16	5	9	7	4	8	11	9	2	0

出所:筆者調査

表1には以上のような調査方法に起因するいくつかの限界が認められる。しかしこの表を用いることによって、S村からの移住に関しておよその傾向を把握することは可能であろう。以下、この表および個別の聞き取りから得られるS村からの主要な移住の流れを、イロコス地方全体の歴史を重ね合わせながら箇条書きにまとめておこう。

独立以前のハワイのサトウキビ農園、カリフォルニアの果樹園などへの男子による短期的、長

期的な移住：S村からは、少なくとも27名の男性がハワイ、カリフォルニアに渡っており、そのうち18人が数年から数十年の滞在を経て帰国している。

独立以前マニラ：主として家事労働を行った女性。1920年生まれの女性は13歳くらいのときに、村の友人達と一緒にマニラに行き、アメリカ人家庭などで家内労働者として就労していた。「当時、ここら辺の女性はマニラに行くことが多かった」と述べる。

独立以前、以降ミンダナオ島ダバオ一帯：アバカ農園で働く男性中心。独立以前日本人が形成するダバオのアバカ農園で多数のS村出身男性が働いていた。また独立以降は、ダバオへ家族で移住した者も増加した。1年から数年で帰村する者もあれば、そのままダバオに移り住む者もいた。

独立以降マニラ首都圏：大学等の学生としてマニラに移り住む村人が増加する。親族の家に居住しながら小学校や高校に就学するケースもある。その場合、学校を終えたあるいは辞めた後に、結婚・就職するなどしてマニラに定着することもある。

50年代～60年代マニラ首都圏：数人の男性がケソン市のある地区に集中していた。その地区の特定の工場に何人かが集中していた時期もあった。

50年代～60年代ラグナ州：パン屋で職人として働く男性、パン屋で売り子をする女性、S村出身者の配属者が所有するピーフン工場で働く男性、女性など。

65年以降米国への移住：65年の米国移住民法改正以降、近親者が米国民または永住者であるという移民資格を持った村人が合法的に米国へ移住する。永住権の取得を前提とする場合がほとんどで、一時帰国も他の外国と比べると少ない。

70年代以降マニラ首都圏（空軍）：少なくとも数人の男性の村人が空軍に所属する他、空軍基地内の親族の官舎に下宿する者もいる。

70年代以降マニラ首都圏（紙器工場）：男性中心。後述。

80年代以降イタリア：男性、女性。1979年に1人の女性が移住した後、親族間の援助によって急速に拡大した。主として家事労働者として就労している。

80年代以降香港、シンガポールなど：通常一定期間の就労を終えると、契約を延長するか、帰国するかを選択する。上記の2カ国は女性の家事労働者がほとんどである。

以上のS村の移住史は、海外移住の中でイタリアが突出しているという顕著な特徴があるものの、1910年代から30年代のハワイ、カリフォルニア、20世紀以降のマニラ一帯及びカガヤン地方やミンダナオ島などの開拓地、1960年代以降の米国、そして1970年代以降の世界の様々な地域へというイロコス地方全体の移住史と同様の傾向をみせている。また特に独立以降の国内移住に焦点を当ててみれば、1970年代以降の空軍、ラグナ州のパン屋やピーフン工場、ケソン市の特定の工場、そして本稿が取り上げる印刷関連工場（紙器工場）などに、村人同士の呼び寄せによって村人が集中する傾向がみてとれる。

一例として1950年代から60年代にかけて盛んに行われた、P町（S村など23村によって

構成される町)からラグナ州カランバ町への移住を簡単にみておこう。当時、カランバには、華人系が経営するパン工場が多数存在しており、P町出身者はそれらパン工場に集中していた。P町出身者の多くは、男はパン職人として、女は売り子あるいはオーナーの家の家事労働者として雇われていた。男性のパン職人に限定して就労状況をみると、当時のカランバには、P町出身のパン工場の職長 *maestro* が複数いた。職長は現場の責任者であり、自分のツテでパン職人をオーナーに推薦することができた。華人系のオーナーは、イロコス出身者は「働きもの」であるというイメージを持っており、そうしたイメージは、職長が自分の親族や同村出身者をオーナーに職人として推薦しやすい状況を作ったと思われる。この時期、職長によってパン工場の職場を紹介されたP町出身者は多数にのぼる。しかしながら、このように職長に推薦されるなどしてパン工場に勤め、そこでパンやビスケット生産に必要な技術などを身につけたP町出身者の中で、次節以下で述べる70年代以降の紙器業に参入した人々のように、自らの工場を設立した者は皆無であった⁴。また、国内移住が集中した他の地域・職種においても、紙器業のように村人が次々と工場を設立したという例はみられない。

次節以下では、こうしたある意味で特殊な「成長」をみせたS村出身者の紙器業への参入について、その拡大経緯、さらにそこにみられる社会関係についての報告を行うことによって、前節までに提起した問題系に接近していきたい。

4 S村出身者のマニラ首都圏の紙器業への参入過程

4 - 1 紙器業へのP町出身者の参入の経緯

前節で触れたように、S村において1970年代以降、マニラ首都圏の印刷関連産業である紙器業⁵に従事する人が増加してきた。これは、1960年前後にP町出身者が、紙器製作の仕事を受注したことに起源を持つ。紙器業の詳細については後述するが、簡単に説明すれば、箱やシール、封筒、ファイルなどが印刷された紙を印刷業者から受けとり、それを刃を入れたベニヤ板の型(以下、本稿では型版と記す)で切り取ったり、折り目をつけたりする仕事である。本節では、まずP町出身の人々がマニラ首都圏の紙器業に集中的に参入することになった経緯を、聞き取り調査から再構成する。についてはP町出身の男性が印刷関係の仕事を受注し、その後仕事場から独立していく過程をみておこう。

4 P町出身でカランバにおいてパン工場あるいはパン屋を所有したとされる唯一の例外は、パン屋の所有者と結婚した女性であり、パン製造職人から独立した事例は全くみられない。

5 本稿で紙器業と訳しているのは、フィリピンにおいてDie Cuttingと呼ばれる産業である。日本における紙器業とフィリピンのDie Cutting産業とは業種の範囲が若干異なるが、ここでは現時点で最適と思われる紙器業という訳を採用した。

< P町出身者による最初の紙器工場設立の経緯 >

P町の東部の村（S村は西部となる）出身のMCは、義理のキョウダイである華人系の家具工場で働いていた。その工場オーナーの友人であるYという華人系が、MCのいる家具工場に靴の箱を注文した。MCはその職人だったので、型版を作ることになった。箱をカットするための型版は、ベニヤ板と *plehe* と呼ばれる箱の留め金で「自分流に *bukod a wido*」つくった。まだ刃を特定の形に曲げたり、切断したりするベンダーと呼ばれる工具がなかった。金のこを使って切り、留め金を研いで歯にした。また紙器裁断のための機械もなかったため、型版ができると型版の上に紙をのせて、上からハンマーでたたくという具合だった。その後Yが紙器工場を設立した。そのYの工場にMCとS村出身のJSが働くことになった。

聞き取りによれば、2人のP町出身者が紙器業に従事するようになった1960年前後のマニラ一帯において、紙器専門工場はほとんどなかったという。そうした状況において、P町東部の村出身のMCと西部のS村出身のJSが、華人系のYが設立した工場で働くようになり、1970年頃にYから独立して2人は別の工場を共同経営するようになる。独立した後は、S村出身のJSの親族1名、P町東部出身のMCのオイ1名、さらにアブラ州出身のもう1人の5人で型版作りを行うようになった。当時の従業員への聞き取りによれば、2人の独立のための資金は、現在紙器工場で扱う刃を工場に卸している華人系のNGと、MCのオジでハワイに長く住んでいる男性（JSのイトコの夫でもあった）から借金をして賄ったという。そして数年後にMCとJSが分かれて別々の紙器工場を設立した。

こうしてパイオニアである2名のP町出身者が工場を設立して以来、親族、同村の工場オーナーのところに働きに行き、そこで技術を習得して、さらに資金をどこからか調達することによって独立して工場を持つということが繰り返されるようになる。図1は、工場のオーナー達への聞き取りからこうした工場の「系譜関係」を記したものである。この図からは、1970年にMCとJSがそれぞれ自分の工場を持って以来、最新の工場の設立年である2000年にいたるまで、P町出身者の工場働く者が次々と新しい工場を設立していった状況を窺うことができる。

また図2は、S村出身の先駆的な工場経営者JSの1970年代の従業員の系譜関係を示した

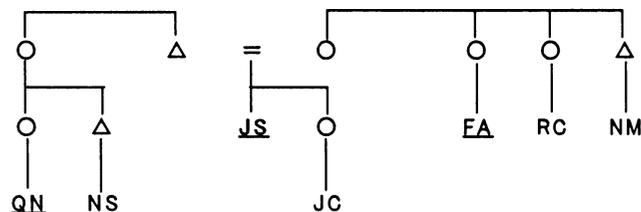


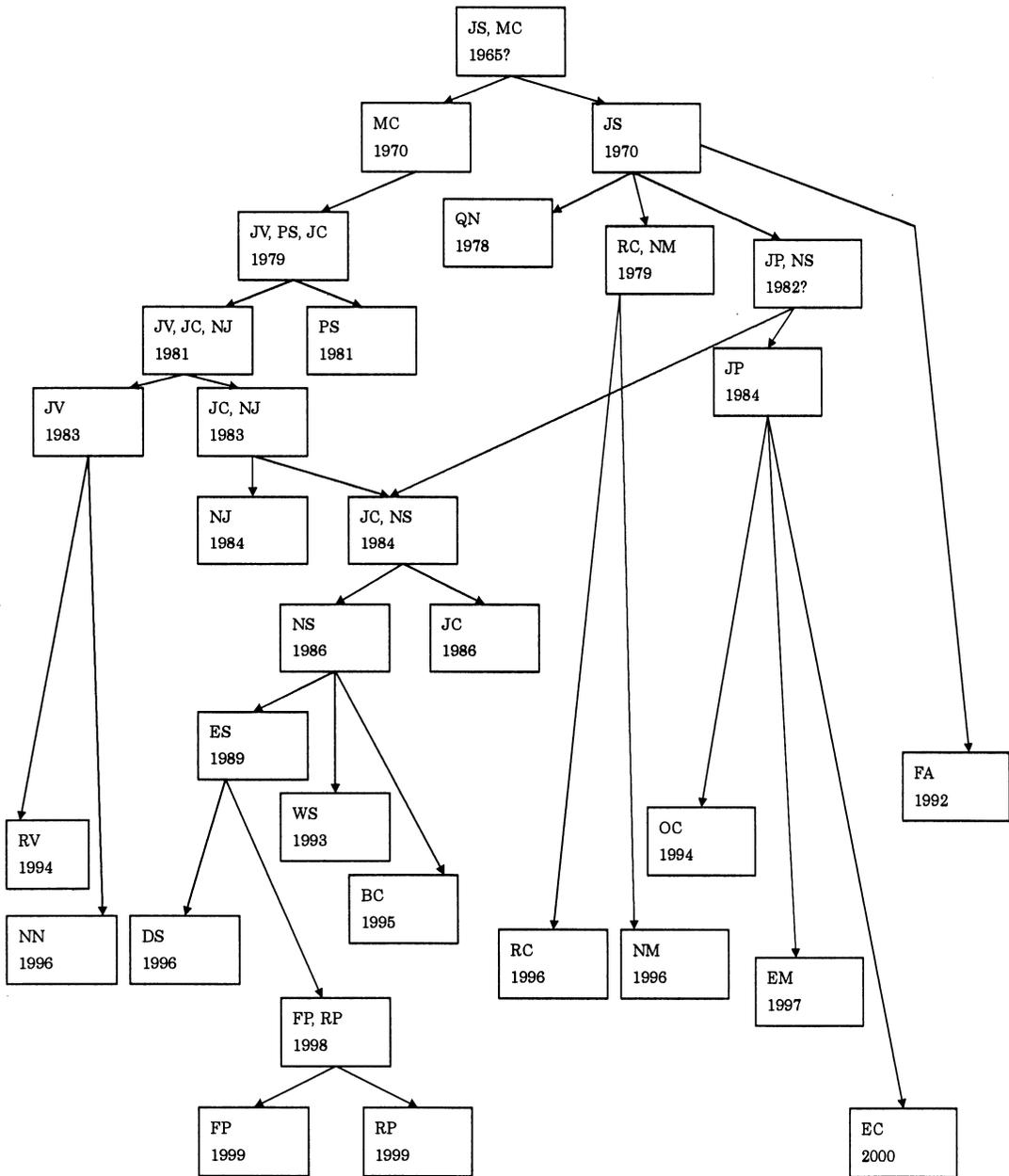
図2 1970年代のS村出身者(JV)の紙器業工場従業員の系譜関係

注1:この他にJSの妻の親族が1人、アブラ州出身の男性1人が勤務していた

注2:アンダーラインは創業時のメンバー

注3:工場従業員に関係していない親族は省略している

図1 P町出身者経営の紙器工場の「系譜関係」



ものであるが、工場の職人は2人を除きすべて経営者の近い親族であった。そしてインシヤルで示された当時の従業員すべてが、その後紙器工場ないしは印刷工場を設立した。このように、すべてのオーナーが工場を設立する以前に同郷の親族の経営する工場職人として働いた経験を持っており、そこで紙器業に必要な技術と経営のノウハウを学んだのちに独立をはたしている。こうしたP町出身者による相次ぐ工場設立の結果、フィリピン印刷業協会が発行している *Directory of Philippine Printers and Buyers Guide* が掲載しているマニラ首都圏の紙器業者15のうち、少なくとも9の業者がP町出身者ないしはP町に親族がいる隣町出身者となっている。またP町出身の紙器工場のオーナー達は、マニラ首都圏に30程存在する紙器工場の大半は、P町出身者の所有であると指摘する。

4 - 2 工場のオーナーのプロフィール

本稿の最後に付けられている付表は、聞き取りを行ったP町出身ないしはP町出身者の親族である紙器工場のオーナー18名⁶の基礎データである。以下ではこの表から読み取ることができるオーナーの諸属性及び工場の経営状況を述べておきたい。尚、これらすべての工場オーナー（創業者）は男性であるが、これは紙器工場内部の仕事が男性の仕事とされていること、そしてすべてのオーナーが工場での就労経験があることによる。

まずオーナーの出身村については、P町S村が多くなっているが、これはすでに述べたように筆者がS村で長期調査を行っており、そのツテで調査対象者を探したことがその理由として挙げられる。しかし同時に、そこにはP町出身で最初の紙器工場を共同で設立した2人のうち1名がS村出身であったことも深く関わっている。聞き取りを総合すれば、P町出身の最初のオーナー2人に連なる西部のS村出身者と、東部のM村及びその周辺村落（B村、G村、及び近隣の町であるS町）出身者が、P町出身の紙器工場オーナーの2大勢力となっている。こうした出身村の集中という点からも、P町出身者の紙器業への参入における親族関係・同郷関係の重要性を見て取ることができる。

オーナーの年齢（2003年時点）は、20代2名、30代4名、40代6名、50代5名となっており、特に集中する年齢層はない。これは、彼らの工場設立のための資金調達方法と関わっていると考えられる。工場を新たに設立するには当然のことながら独立資金が必要となるが、通常それらの資金は、後述するように長年の工場勤務を経た上での雇用主からの支援や本人の貯蓄からではなく、紙器産業の外部の支援者あるいは出資者からもたらされる。つまり、外部からの経済的支援を確保できた時に彼らは独立することができるのであり、紙器工場労働者の独立可能性は、技術の習得（後述）に要する数年間を除けば、工場にお

6 聞き取りは基本的に創業者を対象としている。このうちQNとECはすでに死去しており、工場を引き継いでいる子供、及び一時的に工場の面倒をみるように頼まれた創業者の妻のキョウダイに聞き取りを行っている。

ける勤務年数とはほとんど関係がない。そのことは彼らの工場設立時の年齢が、30歳前後に多少集中しているものの、最低23歳から最高45歳まで、ほぼ切れ目なく連続してみられること、また最初に働きはじめてから独立までにかかった時間が、最短で3年、最長で27年であり、かなりの偏差が認められることにも示されている。

またこれらオーナーが紙器工場で働き始めた年齢は、資料を得ることができた14名のうち、10代が7名、20代前半が6名となっている。例外は他の業種ですでに事業を展開していた者が、30歳で親族と共に共同経営者として紙器業に参入した例である。10代で工場勤務を始める者が最も多く、20代前半で紙器工場で働き始めた者は、たいていマニラや海外で別の仕事をしてから紙器工場に移ってきた者である。

次に工場オーナーの学歴をみておく。彼らの中で4年制の大学を卒業した者は1人もおらず、ほとんどが高校卒業あるいは高校中退という学歴となっており、大学を中途退学した者及び短大・専門学校を卒業ないし中途退学した者が6名(35%)いる。筆者の別の調査によれば、S村一帯からイタリアへの移住者113名のうち、大学卒業者は25%、大学中途退学者及び短大・専門学校の卒業生・中途退学者は21%となっている。また、イタリアへの移住者の学歴と比較するために作成した、イタリアへの移住者と同じ年代(1941年から1978年生まれ)のS村現住者では、大学卒業者は15%、大学中途退学者及び短大・専門学校の卒業生・中途退学者は9%となっている。イタリアへの移住者と同年代のS村現住者を比較すれば、前者の方により多くの高学歴者が含まれている。しかし両者共に一定の割合の大学卒業者がおり、その点でオーナー達の相対的な学歴の低さを読み取ることができる。このことは、工場経営に関して少なくとも現在に至るまで、学歴という文化資本がほとんど意味をなしてこなかったことを示している。

業種についてはほとんどの工場は型版製作(Die Maker)と紙器製作(Die Cutting)を主力としている。紙器業を主たる事業としていないのは、3例だけである⁷。紙器業を中心に行っている工場の中では、型版製作を行わずに紙器製作のみを行っているのは1工場だけであり、ほぼすべての工場が双方を手がけている。また紙器業を主力としている工場の中で、印刷業も同時に行う業者も増加してきており、調査時点で5工場が印刷業を手がけるようになっている。

次に経営規模であるが、聞き取りに基づく工場の規模は、最低で3人、最高で41人となっており、10人以下の零細工場が多い(18工場中13工場)。従業員が20人以上の3例も、約20年前の設立時には零細工場であった。平均月商は聞き取りだけに基づいており目安にしかならないが、100万ペソから3万ペソまでの開きがある。オーナーの中には、欧米、

⁷ その内訳は、1978年の独立当初から印刷業(Printing Press)を中心に補助的に紙器業を行っている例、兄の紙器工場のシルクスクリン部門を独立させた形でシルクスクリン印刷を専門に行っている例、紙器業に参入する前に手がけていたコピー機の販売・保守の事業を主力とする例である。

日本への輸出を手がけており、中国製品と競争している者もいるが、これは例外的に大きな規模であると思われる。

最後に雇用者の内訳についてやや詳しく述べておくと、イロコス地方出身者、あるいはミンダナオ島を含めた他地域出身の親族が雇用されている例が多い。オーナーや紙器工場で働いたことのある村人への聞き取りからは、オーナーが出身地に残っている親族に必要時に人を探してくれるように頼む場合、逆に出身地に残る親族が仕事を手伝いながらマニラの学校に通うために工場に住まわしてくれるように依頼する場合、あるいは出身地からマニラに突然出てきて雇ってくれとオーナーにお願いする場合など、雇用の契機は様々である。親族を雇用することの説明としては「親族を助ける」ということが強調される。また非親族のイロカノを雇うということに関しては「ピサヤとイロカノが混じると喧嘩になる」、「イロカノの方がよく働く」、「ピサヤ、タガログ、イロカノはおかずの好みが異なるので食事の準備が大変である」、などが挙げられた。

出身地からの雇用の場合、食事つき住み込みという雇用形態が主流である。工場で食事をして、夜は工場内に折りたたみベッドを持ち込んで寝る工場もあれば、別に寝るための大部屋がある工場もある。少数ではあるが、家族がマニラにいる者が通いで勤務することもある。給与は、日払い、半月払い *kinsenas*、月払いがあり、こうした給与支給形態や給与額は工場によって異なる。また給与額は一般的には熟練度に応じて上昇していくため、1つの工場の内部においても異なっており、日払いであればおよそ120から250ペソ、半月払いであれば1300から2000ペソ、月払いであれば3000から6000ペソ程度であり、半数以上の工場がSSS（社会保障制度）に加入していない。この給与額は、最も給料の高い熟練の職人で、調査時点（2001年）でのマニラ首都圏における最低賃金（228ペソから265ペソ）程度であり、住み込みとはいえ高いとはいえない。しかしイロコス地方の農村における数少ない就労機会である農業における雇用労働の賃金が、昼食付きで100ペソ（1998年調査時）であることを考慮すると、農村出身の彼らにとって決して低い額ではない。特に紙器工場で働く学歴の低い男性にとって、紙器工場への就職は農村では得ることのできない現金を獲得する貴重な働き口となっている。さらに工場での数年間の勤務を経て紙器業に必要な技術や経営のノウハウを身に付け、独立資金を調達できれば、独立して自分の工場を持つことも不可能ではない。

他方でオーナー達にとって、農村における若年男性労働力を利用することは、低賃金労働力を安定的に必要な時に確保できるだけでなく、オーナーも従業員も同村や親族のネットワークの中にあるため、従業員による何らかの不正をある程度抑制することを可能にしていると考えられる。さらに筆者のS村滞在中には、急な労働力が必要となった場合には、オーナーが電報などで村滞在の親族に「5人が3週間必要」などと知らせ、その親族が労働者を集めることもあった。もちろんこのような低賃金労働力をフレキシブルに確保するためには、突然の労働者の来訪に対して職を与えるなど一定のコストを払う必要もある。

しかしこうした援助 *tulong* の言葉によって語られる農村労働力の調達は、賃金水準の抑制によるコスト削減をもたらすだけでなく、信頼しうる廉価な労働者の労働力需要にあわせてフレキシブルな確保をも可能とすることによって、P町出身者所有の紙器工場の収益上昇に一定の役割を果たしてきたといえる。

以上をまとめると、10代後半から20代前半に紙器工場で働き始めた比較的学歴の低い男性が、数年から数十年間、親族や同村出身者が所有・経営する工場で労働者として働いた後、紙器業の外部から独立資金を獲得して、零細規模の紙器工場を単独か共同（後述）で設立し、そして親族や同村出身の者を雇用する、というのがP町出身者が工場経営を行うに至るまでの一般的なパターンである。ここで注目しておきたいのは、彼らが比較的学歴である点であり、そのことはフィリピンの零細工場オーナーないしは経営者に関する他の調査結果と際立った対照を見せている⁸。この点と、すべてのS村出身の工場オーナーの両親が農業に従事しており、土地所有や経済水準においてイロコス地方の村落社会において決して突出した存在ではなかった点⁹を考慮すると、文化資本と経済資本を持たない農村出身者が、社会関係資本（Social Capital）¹⁰を利用して紙器産業に集中的に参入してきたことがわかる。

5 工場増加の背景

以上述べてきたように、P町出身者達は、親族関係や同村出身といった社会関係資本を利用することによって紙器工場に就職し、技術を習得した後、独立資金を外部から調達して工場を次々と設立してきた。2節でみた村落社会の社会関係の枠組みからみれば、このような紙器工場の拡大は、親族関係や近隣関係といった *awan sabsabali* の間にある人々同士の相互扶助期待に支えられてきたといえる。実際、オーナー達は親族の雇用、工場経営上の親族間の協力を、*awan sabsabali* という言葉や *awan sabsabali* 関係に期待される援助 *tulong* という言葉を用いて説明することが多い。以下はそうした発言の抜粋である。

「(従業員を含めて)我々は皆親族だ。すべてS町出身だ。同じパランガイ出身でもある。…親

8 業種や工場規模の違いなどがあるが、一応の目安となる数字を挙げておけば、日本労働研究機構によるセブ及びダバオにおける中小企業調査では、オーナーの約70%が大学卒業以上である〔日本労働研究機構 1995: 2〕。また菊地によるラグナ州の輸出向け下請け企業の調査では、オーナーの60%以上が大学卒業である〔菊地 1996: 44〕。

9 筆者のS村の世帯調査による。尚、S村の中でもQNと、NSとWSキョウダイの両親は、相続地規模から判断する限り、村落では最上層に位置していた。しかしいずれも田 *talon* と畑 *bengkag* の合計が2 haを越えることはない程度である。

10 文化資本、経済資本、社会関係資本の概念については Bourdieu [1985]、Portes [1998] を参照。

族を雇用することはいいことだ。というのも彼らを助ける *tulong* することになるからだ。(親族がいるのに) わざわざ他人 *sabali* を雇用したりするか?」

「前に(別の工場のオーナーが)仕事をしてくれと頼んできたことがある。私達は *awan sabsabali* だから、そして親族だから、仕事が終わってこちらから電話して彼がとりにきたが、お金を集金する *singir* ようなことはしなかった。もし彼に金ができれば、そのとき支払えばいいので。」

しかし、このような親族間の援助関係は、3節で触れた1950年代から60年代にかけてのラグナ州のパン工場への村人の集中など、他の移住の事例においてもみられるものであり、彼らの基本的な移住戦略とさえいえるものである。従ってこうした *awan sabsabali* 関係にある人々達による援助期待という社会関係の枠組みのみによって、彼らの間での紙器産業の特異な「成長」を説明するのは困難である。この点を踏まえ、冒頭で設定した「制度の中の行為主体への着目」及び「制度が含まれる構造的条件への着目」という2点を念頭におきつつ、P町出身者の間での紙器産業の「成長」の背景を検討していくことにする。以下ではそのような問題関心から、共同経営の不安定性、紙器業自体の特性、紙器業を取り巻く諸条件の3点を検討する。

5 - 1 共同経営と単独経営

図1からも読み取れるように、通常、P町出身者が働いている工場を離れる場合、まず、*sosio* あるいは *sugpon* などと呼ばれる共同経営から始めることがある。JSとMCがP町出身者として最初の紙器工場を設立した際も共同経営であった。多くの場合、イトコ同士、キョウダイ同士などでまず共同経営を始めるが、そのうち分配金のトラブルが生じるなどして分裂し、別の共同経営パートナーをみつけるか、あるいは単独経営に移るかの選択となる。図1からも分かるとおり、ほとんどの共同経営が数年間で解消している。

ここでこうした共同経営の不安定性を、生計の単位を最小化する傾向がある村落社会の「家族制度」との関連でみておきたい。調査を行った村落においては、近親者は *awan sabsabali* であり助け合うことが期待される一方で、結婚後の夫婦は可能な限り生計の独立性を保つこと(生計を分ける *sina* こと)、そして老齢のオヤも自分達が働ける間は可能な限り子供に頼らないという緩やかな規範もみられる。こうした既婚夫婦の家計への独立への希求は、結婚後に得られた財産は基本的に夫婦の所有となるという考え方と結びついている。結婚以前のキョウダイ関係や親子関係と異なり、結婚後のそうした関係における経済的な協力には、それぞれの配偶者への配慮が必要となるとされる。村落社会においては、様々な個別の条件に合わせて *awan sabsabali* とされる人々の間での様々な形での生計の共同が行われているのであるが、こうした生計の共同は時に近親者間の反目の背景となりうる側面を持つ[長坂 2001]

こうした人々の生計活動をゆるやかに方向付ける「家族制度」は、共同経営の不安定性の一つの背景となっていると考えることができ、そのことは、共同経営の困難を説明するオーナー達の言葉の中に窺うことができる。

「もちろん、私達（3人）には妻がいた。もしそこでけんかしたり、もめごとが起きたりするようになったら大変だ。共同経営 *sosio* は難しい。一緒に住んでいたし。...もちろん妻達がよかったりしても、それではその子供達はどうか？」

「（共同経営は）難しい。家族 *pamilya* がいるならば自分のもの *bukod* にしたほうがよい。たとえキョウダイ関係がよくても婚入者達 *naikamkamang* がわかりあえないこともある。」

ここではたとえ共同オーナー自身が納得していても、妻や子供といった彼らの家族 *pamilya* が納得しない場合があると述べられており、「家族」間の協力の困難が、共同経営の困難と結びつけられている。そしてこうした説明は、村落社会における世帯間の協力の困難を語る際の言説と同じパターンをとっている。ここで注目したいのは、こうした彼らの共同経営についての言説にみられるような出身地社会における「家族」制度のあり方が、共同経営の存続による事業の拡大よりは、事業を細分化してでも独立した工場を生み出す方向に作用し、その結果、零細工場の乱立とでも呼ぶべき状況をもたらしたことである。

これまでみてきたように、P町出身者による紙器業への集中、そして工場の増加は、確かに *awan sabsabali* とされる家族・親族関係の枠組みにおける相互扶助規範を基盤としている。しかし、そうした家族・親族関係依存による彼らの紙器業への集中的参入は、相互扶助規範の論理で説明可能な一方向的・調和的な過程というよりは、*awan sabsabali* という関係性にある者同士の打算のない支援 *tulong* への期待、そしてそうした期待と対立するような分離 *sina*、排他性 *bukod* といった概念によって示される世帯経済に関する規範を含んだ家族・親族関係の枠組みを、諸個人が特定の政治経済的諸条件の中で運用していくという、それ自体極めて複雑な過程であるといえることができる。この点を確認した上で、次節以下では、紙器業自体の特性とそれを取り巻く諸条件を検討していこう。

5 - 2 工程・資本・技術

以下では彼らの工場の増加を促したと思われる紙器業自体の特性をみておきたい。についてはまず、型版製作から紙器製作に至るまでの紙器業の工程を説明しておく。

工程には大まかにわけて次の6段階がある。

レイアウト (*lay-out*): 注文を受けた箱について、サンプルの図面をまねて紙に図面を引く。
筆者が観察した例では、オーナーが、コンパスと定規各種を用いてすばやく図面を引いていた。
電動糸鋸 (*jigsaw, ragadi*): ベニヤ板にレイアウトを貼り付けて電動糸鋸をあて、溝を入れる。

型版作り (blade making): 糸鋸で溝が入れられたベニヤ板に、ベンダーという工具を用いて刃を溝の形に合わせて折り曲げたりしながら入れていく。型版の価格はこの刃の長さによって決まる。(1インチ6ペソ、7ペソという具合である)

ゴムつめ (goma): 型版に入れられた刃のまわりにゴムをつけていく。ゴムをつけることによって裁断・折り目つけのときに、紙を押し返し、紙が機械にくっつくことなくなるという。

裁断 (subo): 型版がはめられた機械に、印刷された紙一枚を入れ、挟み込むと裁断・折り目づけ (以下、単に裁断と記す) がなされる。まず機械に型版をはめ、紙を入れて型版の微調整を行う。微調整が終わると、紙の裁断作業に入る。機械の操作は、ほとんどの場合手動であり、一枚の裁断が終わると同時に紙を抜き取り、別の一枚をすばやく入れる。この作業は手をはさんだ場合には指を切断する恐れもある危険な作業である。

切り取り (tasatas): 機械によってすでに切れ目、折り目がついている紙から、箱に使わない余分な部分を切り離す。

すでに触れたように、紙器業者の中には印刷業も手がけている業者がいるが、印刷機を保有していれば印刷からの工程となる。また裁断の機械を所有していない場合、裁断以下の工程を省き、から の工程で型版だけを製作して売ることにも可能である。逆に型版製作の工具を保有せずに裁断だけを行うことも可能である。つまり、型版作りのための必要な機械や工具、すなわち彼らがいうところの「ベンダー一式」(電動糸鋸 *ragadi*、電動錐 *barrena*、ベンダー *bender*) さえあればとりあえずは商売になるということであり、独立に際してベンダー一式だけで工場を設立した者も多い。付表には工場を独立させたときの初期投資が記されているが、それによれば、シルクスクリンを行っている1例と初期投資が不明の1例を除く16工場のうち、6工場がベンダー一式のみで、すなわち型版製作のみで工場を設立している。彼らはその後数年間のうちに、型版製作の利益から裁断用の機械を購入して事業を拡大させている。また、逆に裁断用の機械のみで独立を果たした工場も2例ある。

このような工程が分割可能であるという紙器業の特性は、紙器業への低資本での参入が可能であることを意味している。付表の中の独立費用はオーナーへの聞き取りのみに基づくものであるが、同時期に独立した工場間の比較では、例えばベンダー一式で1996年と1995年に独立したDSとBCがそれぞれ12万ペソと10万ペソの独立費用を要したのに対して、1997年にベンダー一式と裁断用の機械1台で独立したEMは20万ペソの独立費用であった¹¹。このような資本集約的ではないという紙器業の特性は、後に触れるような独立

11 こうした紙器業の低資本での参入可能という特長は関連産業である印刷業と比較すると一層際立つ。P町出身者の紙器業者と1970年代からつきあいのある中国系の印刷業者は「紙器業は10万ペソもあれば始められるが、印刷業は数百万ペソが必要だ」と述べる。P町出身者が印刷業を始める場合も、ほとんどの場合紙器業で資本を蓄えた後、印刷業に事業展開するという形をとる。

のための資金調達を容易にしており、P町出身者が紙器工場を多数設立させてきた一因となっていると考えられる。

次に紙器業に必要な技術の習得過程に触れておこう。すべての工場のオーナーは、P町出身者の工場での勤務経験があり、そこで仕事を覚えて独立するという経路を辿る。その際、一つの工場で20年以上も働き続ける場合もあれば、P町出身者の複数の工場を渡りあるいたり、あるいは別の仕事に移り再び紙器産業に戻ってきたりする場合もある。次の言葉に示されるように、最初に買い物や掃除といった雑用とゴムつめから始まり、次に電動鋸、そして型版作りとレイアウトを習得する、という順序が一般的である。

- ・ 「最初の仕事は型版の配達だった。..(オジの工場に住みながら)高校に通っているときに、裁断機操作 *subo* の経験はあった。教えてもらった。18歳(になって仕事に就くようになって)から *subo* をはじめる。ESのところでは指をなくした人がレイアウトを担当しているので、レイアウトはしなかった。誰も教えてくれなかった。ただ見て覚えた。」
- ・ 「(華人系の別の業種の工場から)紙器産業に移ってきた。そのときの仕事はゴムを詰めること、それから掃除。それから鋸を覚えた。それから、簡単に型版作りを覚えた。..彼らはこうだこうだと言うくらい。レイアウトや印刷のことなど誰にも教えてもらっていない。」

これらの例に共通する点は、レイアウトなどの技術は「教えられたわけではなく」、「見て覚えた」ということである。雑用とゴムつめ、さらには切り取り *tastas* から始まり、危険な仕事である裁断機操作 *subo* などを覚えながら、工場オーナーや長く勤めている者が行うレイアウトや型版作りを「見ながら」習得していくというパターンは、多くのオーナーに当てはまる。そしてその際、「興味 *interesado*」があればすぐ覚える、という点も多くの工場オーナーが指摘するところである。

とはいえ技術・知識を簡単に覚えることができたという彼らの説明は、必ずしもこうした技術・知識に価値がないことを示しているわけではない。例えば、現在は独立して紙器業と印刷業を経営する男性は、以前、レイアウトや型版製作の技術を買われて華人系の紙器工場から高額な給料で誘いを受けていた。また、共同経営の際に、出資額の差が大きかったのにも拘わらず利益は平等に分配するという約束が作られた例があるが、これは出資額が小さい2人が、出資額の極端に大きい1人にはないレイアウトや型版作りの知識・技術を持っていたからであると説明された。

レイアウトや型版作りが工場内でなかなか教授されない状況も、こうしたレイアウトや型版作りの技術・知識の重要性と関係している。というのも、工場オーナーにとってそうした技術を広めることは、将来教えた者が独立することによって自分の顧客が奪われることにつながりかねないからである。しかしこの点は別の角度から見ると、P町出身者がマニラ首都圏において紙器業者の多くを占めているという状況を生み出したともいえる。上

述したように雇用主がP町出身者を雇っている限り、結果的に彼らのネットワーク内部での「技術の囲い込み」とも呼ぶべき状況が生じ、こうした知識や技術をもって独立する人はP町出身者に限られるからである。

5 - 3 紙器業を取り巻く諸条件

次にP町出身者による紙器工場の相次ぐ設立を可能にした紙器業を取り巻く諸条件として、製品需要の増大とフィリピンからの海外移住の拡大という点を取り上げよう。

紙器業の製品は、食品（ファーストフード、ケーキ等）、薬や生活必需品（石鹸等）その他の箱、またファイル、封筒などの文具、ステッカー、衣類のタグなどが含まれる。ちなみに1つの工場で筆写した帳簿に記載されていた製品は次のようなものであった（重複を省く）。薬の箱、花火の箱、Tシャツのタグ、ズボンのタグ、ポップコーンのカップ、魚醤のピンのシール、ファーストフードチェーン（ジョリビー）の旗、ズボンのタグ。

これらの製品の製作は、いずれも製薬会社、アパレル会社、ファーストフードチェーンといった企業の子会社である印刷会社、あるいはそれら企業から注文を受けた印刷会社からの下請けの仕事となる。すでにみたようにP町出身者の多くは印刷業を行わず、型版製作及び紙器製作のみを行うので、仕事の交渉先はこれら印刷会社となり、一部のオーナーを除いて企業と直接交渉を行うことはない。また、*jobber-jobber*と呼ばれる仲買人が間に入ることもある。それら仲買人は、箱作りの仕事を請け負い、材料をそろえて印刷会社に印刷を依頼し、印刷が終われば、紙器業者に印刷物のカットを依頼する。

表2 産業別製造業粗付加価値（1985年価格評価）

	1980	1985	1990	1995	1998	1998/1980
食品	75.3	64.4	69.6	71.1	78.7	5
飲料	4.0	6.5	7.4	7.7	9.0	125
タバコ	4.9	5.0	5.1	5.1	5.5	12
繊維	7.9	5.3	6.7	5.6	5.1	-35
履物・衣料	7.2	5.7	10.0	13.2	12.7	76
木・コルク製品	6.4	2.8	4.1	2.9	2.8	-56
家具・調度品	2.5	1.7	2.6	2.5	2.9	16
紙・紙製品	1.7	1.5	2.2	2.2	2.1	24
出版・印刷	2.3	1.4	3.0	3.1	3.1	35
皮革製品	0.2	0.1	0.1	0.2	0.2	0
ゴム製品	2.8	1.9	2.8	2.5	1.8	-36
化学製品	12.4	10.6	11.5	12.6	14.2	15
石油製品	16.4	18.1	30.0	36.1	37.5	129
非金属製品	4.6	2.7	4.6	6.6	6.6	43
基礎金属工業	2.7	4.4	4.9	5.5	4.7	74
金属工業	4.0	2.9	4.5	4.6	4.2	5
機械	2.3	1.3	2.1	2.9	3.5	52
電子機器	3.7	4.7	7.1	12.1	19.3	422
輸送機器	5.2	0.9	1.9	3.0	1.8	-65
その他製造業	2.0	2.0	3.7	4.1	5.3	165
製造業合計	168.5	143.9	183.9	203.6	221.0	31

出所：Pambansang Lupon sa Ugnayang Pang-Estadistika 1999 *Philippine Statistical Year Book* 及び 菊池 1996:31より作成

表2は1980年以降の産業別製造業の粗付加価値の推移である。1980年代半ばまでの経済危機及び政情不安によって生産が落ち込んだほとんどの産業は、80年代後半以降、回復し

始める。とりわけ電子機器といった輸出関連産業の成長が著しいが、その中において紙器業が下請けする出版・印刷産業や紙製品産業も生産を伸ばしてきた。1980年に粗付加価値で17位であった出版・印刷業は1998年には13位に、紙・紙製品産業は18位から16位に順位を挙げている。また、事業所センサスによれば、同様の時期1978年から1994年までの期間、出版・印刷業に分類される、紙器業と関連の深い商業印刷業の事業所数及びセンサス付加価値は、10人以上の従業員規模でそれぞれ1.61倍と14.52倍に増加し、この数字は印刷関連産業全体の同様の数字（1.52倍と6.90倍）さらには製造業全体の数字（1.27倍、10.10倍）を上回っている。製紙・紙製品については、その下位分類である紙製箱・容器の同時期の同様の数字、1.33倍、11.95倍は、製紙・紙製品全体の数字（1.45倍、20.54倍）を下回っているが、製造業全体の数字を上回っている¹²。

こうした商業印刷産業及び紙製箱産業の拡大は、紙器専門の工場がほとんどない状態で紙器業に参入したP町出身者の親族ネットワーク依存という戦略を有効なものにしたと考えられる。つまり、彼らが親族ネットワークを用いて工場設立を行った背景には、市場は拡大するが競争相手はほとんどいないという特殊な経済状況があったのであり、そうした経済状況は、上述した親族ネットワーク内部での「技術の囲い込み」によって、幾分緩まった形ながらも1990年代まで存続していたと考えられる¹³。

次にフィリピンにおける海外移住の拡大との関連を検討しよう。フィリピン政府は1974年以来、労働力の輸出を政策として取り入れている。当初は一時的な失業問題の解決策として始められた労働者輸出政策であるが、海外からの送金が国際収支回復のための不可欠な手段であるという認識が強まるに従って、政府は海外への労働者の送り出しを積極的に推進するようになった [Alegado 1992]。こうした政策と経済的停滞を背景として、フィリピンは現在、1991年以来毎年60万人以上の契約労働者が海外に流出するという世界有数の「労働者輸出国」となっている。

イロコス地方は、3節でみたS村の移住史からも読み取ることができるように、フィリピンからの海外移住の拡大に積極的な役割を果たしてきた。例えば国立統計局の「海外フィリピン人調査」のサンプル調査によれば、フィリピンからの海外移住労働者にイロコス地方出身者が占める割合は、13.2%であり、これは全人口に占める同地方出身者の数字5.5%の倍以上となっている [NSO 1997a:XXX; NSO 1997b:315]。ここで注目したいのは、P町出身者の紙器工場設立のための資金が、このような歴史の中で海外に移住した親族からもたらされることが少なくないという点である。

¹² *Census of Establishment* の1978年版及び1994年版から算出。

¹³ このような状況は次のようなP町出身の紙器工場オーナーの言葉からも推察される。「紙器業ではお前が顧客を探すのではない。顧客がお前を探すのだ。」また、P町出身者が工場を設立する際の顧客の探し方は、印刷業者が記載された電話帳を使ったというオーナーもいるが、多くの場合、自分が働いている工場の顧客にあらかじめ声をかけておくという形で行われる。そうした形での顧客の奪い合いが親族間の深刻な対立に至っていないという筆者の観察は、ここで指摘した紙器市場の拡大と関連していると考えられる。

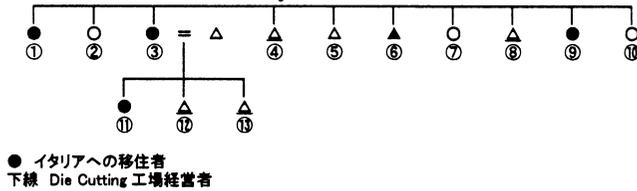
独立資金の主な捻出方法としては、自己資金、華人系の刃の業者あるいは印刷業者からの借金、同業の親族からの援助あるいは借金、海外の親族からの援助あるいは借金、がある。自己資金は、共同経営時の蓄えと、自身が海外で就労したときの蓄えの2つがあるが、自己資金のみで工場を設立できたのは、12年間サウジアラビアで働いていた者、19年間紙器工場の共同経営をしていた者、紙器業参入時点で他業種ですでに商売を行っていた者の3名のみである。

2番目の華人系業者からの借金については、裁断の機械を扱っている業者であれば、機械を支給して、機械購入費を売り上げから徴収するという方法を取り、支払いが滞った場合機械を引き上げるという形をとる。裁断機械業者による融資の全ては特定の業者Nによるものである。印刷工場のオーナーからの借金の場合、仕事を与えて売り上げの一部から借金を返済させるという方法をとる。独立資金の捻出方法が判明した16名のうち6名が華人系業者から借金をしている。華人系の業者がこうした融資を行うのは、利子収入だけでなく、刃や裁断機の業者にとっては顧客を確保することができるからであり、印刷業者にとっては急な仕事にも必ず応じてくれる紙器業者を確保することができるからである。こうした特定の華人系業者とのつながりを基にした融資は、彼らの工場の相次ぐ設立に一定の役割を果たしてきたといえる。

3番目の勤めていた親族の工場オーナーによる借金・援助は、表中ではキョウダイに支援された2例のみであり、1例は、印刷業者からの借金で裁断機を購入し、兄からの借金は補完的なものに留まっている。もう1例の1993年に独立した例では、雇用主であった兄から車と150,000ペソを独立資金としてもらい、さらに紙器工場を運営する姉夫婦から100,000ペソを借金した。いずれにしても、蒐集した事例の中ではこうした工場オーナーからの援助は、キョウダイ同士に限られており、その数も少ない。

ここで注目する4番目の海外在住親族からの借金・援助は、P町出身者で最初に工場を設立したMCらも、ハワイにいるオジに資金援助を依頼したように、1960年代にすでにみられたものである。オーナー16名のうち9名が独立に際してなんらかの形で海外在住親族の支援を受けている。具体的には、「イタリアで家事労働者として働く母が購入した機械と車、さらに工場の所有者に支払う保証金として2万ペソをもらって独立した」、「香港で家事労働者として働く姉から2万ペソを借りて独立資金の足しにした」、「妻のキョウダイの1人の海外船員から5万ペソを借りてベンダー一式を購入して独立した」、「カリフォルニア在住のオジから100万ペソを融資してもらいベンダー、車、裁断機を購入して、オジと共同経営を始めた」など様々なケースがある。ここでこうした海外に拡大する親族ネットワークと紙器工場の関係を理解するために、一つの家族の事例を詳しく紹介しておこう。

図3 Sensano Familyの事例



注) ③がマニラ在。④のみがS村在住。⑤以外の配偶者以下は省略してある。

<ローマへの移住>

1948年生まれの③は、1985年に米国在住のイトコ等に借金してローマへ行った。S村及び近隣出身者9名ですでにローマで家事労働者として働いていたS村出身者の雇用主の家に押しかけた。職を得てから2年後に④をローマに呼び寄せる。1989年には、マニラで裁縫の仕事をして⑤を呼び寄せる。1992年には⑥が③にローマ行きの金を貸し、ローマに呼び寄せた。同じく1992年には、⑥が娘⑬をイタリアに呼び寄せており、娘⑬はローマで就労しその後ローマ在住フィリピン人と結婚している。(④、⑤、⑥への聞き取り)

< Die Cutting工場経営 >

最初に印刷業に就職したのは④であった。1958年生まれの④は、当初は③の経営する裁縫の仕事場で働いていたが、その後いくつかの職業を経験した後、1980年頃に、P町の紙器産業のパイオニアであり、かつS村で同じ集落に住んでいたJSの工場で働く。その後、JSが最初に働いていた華人系の紙器工場や親族の紙器工場などで勤務しながら、レイアウト等すべての仕事を覚える。1989年には姉③に160,000ペソを「借金」して独立。

1969年生まれの⑤は、1990年頃、大学を一年足らずで辞めて、S村で近隣に居住していた男が勤めている別の業種の工場で働いた後、兄④の紙器工場で働く。1996年に機械を購入した⑤は兄④の工場から独立。独立のための資金は、ローマにいる妹③に9万ペソ借り、さらに他のローマ在住のキョウダイにも借金した。ただし⑤にはまだお金を返していない。二人のキョウダイは現在も紙器工場を経営する。

④の子供たちは、当初④の工場で働く。当初の予定では④は⑤と共同経営を希望し、資金を提供したが、⑤は共同経営という形に納得しなかった。このような経営形態に関するお互いの理解の不一致から、④は、当時④の工場で働いていた④の子供たちに機械を引き取って独立せよと指示する。実際、④の子供である⑤と⑥が2人で1998年から独立するときに4台の裁断機を④の工場から持ち出した。他の紙器業者への聞き取りでは、「④が共同経営者であるイタリア在住の③にお金を渡さなかったことが原因である」と⑤に厳しい意見がある一方で、また「いきなり④の子供たちが機械を持っていくのはひどいことであり、④は傷ついたであろう」と⑥に同情する意見もあり、この間の経緯は判然としない。いずれにしても次の年、⑤から独立した2人のキョウダイは、再び工場を分裂させ、それぞれ独自に工場経営を行っている。(④、⑤、⑥への聞き取り)

この事例では、海外在住者から支援を受けた紙器職人が工場を設立している状況、そして同時に共同経営が長期化することなく工場が分裂していく状況をもとることができる。この事例に見られるような海外移住者からの資金援助は、海外移住が拡大した1980年代以降、すでにみた米国やイタリアだけでなく、香港や船員などからの援助もあり、珍しいことではなくなっている。このようにP町出身者による親族ネットワークに依存した形での紙器業への集中は、1960年代から拡大した、イロコスからアメリカやその他の地域への海外移住の拡大、あるいは彼らの親族のネットワークの海外への拡大という現象を一つの重要な背景としていたということが出来る。

6 おわりに

以上、「制度と行為主体」という本プロジェクトの共通課題に引き寄せながら、現地調査に基づきイロコス・ノルテ州の特定の町出身者によるマニラ首都圏における紙器産業への集中の過程を記述分析してきた。その結果、出身地社会における親族関係を中心とする社会関係を援用することによって彼らが紙器産業に集中的に参入してきたこと、しかし彼らの親族関係の援用は彼らの紙器業への集中を促すと同時に零細工場の乱立とも呼ぶべき状況を帰結したこと、さらに彼らの親族関係依存の紙器業への集中の背景として、低資本での参入が可能であったこと、親族や同村出身者を雇用することによって紙器業に不可欠な技術の「囲い込み」が生じたこと、工場の増加を許容するだけの紙器需要の増大があったこと、海外在住親族の増加によって工場設立のための資金調達が容易となったこと、などが指摘され、紙器業への集中過程における彼らのネットワークの様態は、そうした諸条件の下で彼らが既存の社会関係の枠組みを運用した結果であることが示された。

最後に本稿の事例研究の実証的・理論的可能性について、2つの問題点に絞って展望しておこう。まず本稿の最後で触れた海外在住親族の支援による工場設立の事例は、海外送金の新たな使用形態の出現を示唆しているといえる。従来フィリピンからの海外移住の研究においては、特に農村出身者の場合、海外契約労働者あるいは海外移民からの送金は、子供の教育、社会的威信を伴う儀礼の挙行、家屋建築、耐久消費財購入などに充てられることが多く、生産に関わる使途としては農機具や農地などに集中する傾向があるといわれてきた¹⁴。実際、筆者の農村調査においてもそうした傾向が確認された。しかし、都市部の調査を基にした本稿の事例では、農村、都市、そして海外にまたがる家族ネットワークの中で、農村出身の海外移住者からの送金が都市部の工業生産活動へと流入している状況

¹⁴ 海外契約労働者の支出パターンについてはILMS [1984:65 - 70]、送金の生産効果への否定的な見解としてはCariño [1987:218]、儀礼的消費についてはNagasaka [2000]をそれぞれ参照。

が見出された。今後、本稿の調査結果を踏まえ、こうした家族・親族のネットワークを通じた工業生産活動への海外からの資金の流入¹⁵がどの程度行われているのか、そしてそうした現象が生じる条件があるとすればそれはいかなる条件の下においてか、さらにそうした現象はフィリピン社会に「新たな企業家層」を生み出しうるのか、などといった点を検討していくことは、600万人以上の海外在住者を抱えるフィリピン社会の社会変容を明るみに出す可能性を持つと同時に、社会関係資本と開発・発展の関係を特定の歴史的条件の下で検討することを可能にするであろう。

もう1つは本稿の基本的枠組みに関する点である。本稿は、イロコス地方出身者によるマニラ首都圏の紙器業への集中を、家族・親族のネットワークに着目しながら記述分析を行ってきたが、その際、イロコス地方の村落社会における社会関係の枠組みをある程度内在化してきた個人によって、特定の政治経済的条件の中で、いかに人々が親族ネットワークを運用してきたかという観点からそれを行った。こうした本稿の枠組みは、単に人々の間での親族ネットワークの重要性を指摘するだけでなく、いかなる政治経済的条件の下でいかなる形での親族関係の運用が可能となったのかを問う近年のポリティカルエコノミーの観点からの親族研究¹⁶と連結可能性を持つものである。このような観点からの研究は、フィリピンの家族親族研究では一部の歴史研究¹⁷を除いてほとんど行われておらず、それゆえ国家政策や経済のグローバル化といったより広い政治経済的コンテキストにおける家族・親族関係の歴史的動態の考察を通して、従来のフィリピンの家族・親族理解の再検討につながりうるのではないかと考えられる。

15 海外移住の拡大と農村工業の発展との関係については、菊池が指摘している [1996 : 50]

16 ポリティカルエコノミーの視点から親族研究に関する学説史的立場づけについてはPeletz [1995]を参照。近年の事例研究としてはShrauwers [1999]、Rothstein [1999]がある。

17 例えばMaCoy [1994]など。

参考文献

- 菊地眞夫 1996「フィリピン首都圏近郊における農村工業の生成：ラグナ州の輸出向け衣料下請業の事例」『アジア経済』37(5)：27 - 65 .
- 合田濤 1997『イフガオ：ルソン島北部の呪詛と変容』弘文堂
- 清水昭俊 1999「忘却のかなたのマリノフスキー：1930年代における文化接触研究」『国立民族学博物館研究報告』23(3)：543 - 634 .
- 瀬川昌久 1997「人類学における親族研究の軌跡」青木保他編『岩波講座文化人類学 第4巻 個からする社会展望』岩波書店
- 田中雅一 1998「ヨーロッパの人類学：フレデリック・バルトの仕事をめぐる」船曳建夫編『文化人類学のすすめ』筑摩書房
- 玉置泰明 1982「フィリピン低地社会研究序説」『民族学研究』47(3)：265 - 96 .
- 長坂格 2001「故郷で養育される移住者の子供達：フィリピンからイタリアへの移住における家族ネットワーク」『民族学研究』66(1)：26 - 48 .
- 長坂格 2003「移住における親族ネットワーク：フィリピンからイタリアへの移住の事例研究」岩崎信彦他編『海外における日本人、日本のなかの外国人』昭和堂
- 日本労働研究機構 1995『発展途上国の雇用開発（フィリピン）：質問紙調査編』日本労働研究機構
- ラドクリフ＝ブラウン、A. R.1975『未開社会における構造と機能』（青柳まちこ訳）新泉社
- リーチ、E. 1985『社会人類学案内』（長島信弘訳）岩波書店
- Alegado, D. T. 1992 "The Political Economy of International Labor Migration from the Philippines." Ph D. Dissertation, University of Hawai'i.
- Bourdieu P. 1985. The forms of capital. In *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*. Richardson, JG.(ed) New York: Greenwood
- Caces, F. 1985. "Personal Networks and the Maternal Adaptation of Recent Immigrants: A Study of Filipinos in Hawaii." Ph.D. Dissertation, University of Hawaii.
- Caces, F, et al. 1985. "Shadow Households and Competing Auspices: Migration Behavior in the Philippines." *Journal of Development Economics* 17:5-25.
- Cariño, B.V. 1987. "The Philippines and Southeast Asia: Historical Roots and Contemporary Linkages." In Fawcett, J.T. and B.V. Cariño (eds.) *Pacific Bridges: The New Immigration from Asia and the Pacific Islands*. New York: Center for Migration Studies.
- Guarnizo, L. E. and M. P. Smith. 1999. "The Location of Transnationalism." In Smith, M. P. and L. E. Guarnizo. (eds.) *Transnationalism from Below*. New

- Brunswick, New Jersey: Transaction Publishers.
- Gurak, K. D. and Caces, F. 1992. "Migration Networks and the Shaping of Migration Systems." in M. M. Kritz et al. (eds.) *International Migration Systems: A Global Approach*. Oxford Clarendon Press.
- ILMS (Institute of Labor and Manpower Studies). 1984. *Working Abroad: The Socio-economic Consequences of Contract Labor Migration in the Philippines*. Manila: ILMS.
- Massey, D. S. et al. 1993. "Theories of International Migration: A Review and Appraisal." *Population and Development Review* 19(3):431-216.
- McCoy, A. ed. 1994. *An Anarchy of Families: State and Family in the Philippines*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Nagasaka, I. 1998. "Kinship Networks and Child Fostering in Labor Migration from Ilocos, Philippines to Italy." *Asian and Pacific Migration Journal* 7(1):67-92.
- . 2000. "Giving a Feast in the Homeland: Ilocano Feast and Transnational Linkage in Ilocos, Philippines." In Abe, Kenichi and Masako Ishii (eds.) *Population Movement in Southeast Asia: Changing Identities and Strategies for Survival*. Osaka: Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology.
- NSO (National Statistic Office) 1997a. *Philippine Year Book*.
- . 1997b. *Survey on Overseas Filipinos 1993-1995*. Vol. I.,
- Ortner, S. 1984. "Theory of Anthropology sine the Sixties." *Comparative Studies in Society and History* 26:126-66.
- . 1996. *Making Gender: The Politics and Erotics of Culture*. Boston: Beacon Press.
- Peletz, Michael G. 1995. "Kinship Studies in Late Twentieth-Century Anthropology." *Annual Review Anthropology* 24:343-72
- Pertierra, Raul. 1988. *Religion, Politics, and Rationality in a Philippine Community*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Pertierra, Raul. ed. 1992. *Remittances and Returnees: The Cultural Economy of Migration in Ilocos*. Quezon City: New Day Publishers.
- Portes, Alejandro. 1998. "Social Capital: Its Origins and Applications in Modern Sociology." *Annual Review of Sociology* 24:1-24
- Roseberry, W. 1988. "Political Economy." *Annual Review of Anthropology* 17:161-85.
- Rothstein, F.A. 1999. "Declining Odds: Kinship, Women's Employment, and Political Economy in Rural Mexico." *American Anthropologist* 101(3):579-593.
- Schrauwers, Albert. 1999. "Negotiating Parentage: the Political Economy of 'Kinship'

- in Central Sulawesi, Indonesia." *American Ethnologist* 26(2):310-323.
- SyCip, L., and J. Fawcett. 1988. *Expectation, Family Network, and Emigration: A Study of Filipino Decision Making*. East-West Population Institute, Working Papers no.238. Honolulu: East-West Center.
- Trager, Lilian. 1988. *The City Connection: Migration and Family Interdependence in the Philippines*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Wolf, Eric. 1955. "Types of Latin American Peasantry: A Preliminary Discussion." *American Anthropologist* 57(3):452-71.
- . 1986. "Vicissitudes of the Closed Corporate Peasant Community." *American Ethnologist* 13(2):325-29.
- Wood, Charles H. 1982. "Equilibrium and Historical-Structural Perspectives on Migration" *International Migration Review* 16(2):298-319.
- Young, J. 1980. "Migration and Education in the Philippines: An Anthropological Study of an Ilocano Community." Ph.D. Dissertation, Stanford, California: Stanford University.

付表 聞き取りを行ったオーナーのプロフィール

氏名	経営形態	出身	生年	教育	印刷業開業	出資者	出資者の属性	独立費用	独立年	初期投資	機械所有	雇用者数	雇用者内訳	月商	業種
FA	単独	P町-S村	1952	小学校卒業	1968	業のキョウウダイ	海外船員	50,000	1992	ペンダー一式	ペンダー一式、DCM2、車	6	S村1、ダバオ2(親族)、又エハエシハ2(親族)、マニラ1	50,000	紙器・型版製作
BC	共同	P町-M村	1963	高校卒業	1983	自己資金+オジ	ハワイ在住	100,000	1995	ペンダー一式	ペンダー一式2、DCM3、車	3	P町2(親族)ピサヤ1(親族)	50,000	紙器・型版製作
JC	単独	P町-G村	1944	小学校中退	1967	?	?	15,000	1983	ペンダー一式	ペンダー一式2、DCM6、車	6	P町5、又エハエシカヤ1(親族)	100,000	紙器・型版製作
EM	単独	P町-S村	1968	高校中退	1983	BN氏+妻の貯金+姉	華人系列業者、姉は香港在住	200,000	1997	ペンダー一式+DCM	ペンダー一式、DCM5、車	7	S村4(親族3)、イロコス1(親族)、不明2	100,000	紙器・型版製作
NM	単独	P町-S村	1952	高校中退	1969	自己資金	(共同経営時代の貯蓄)	1,500,000	1996	ペンダー一式	ペンダー一式、DCM2、車、オフセット	9	マニラ2、S村1、イロコス3、又エハエシハ3	50,000-500,000	印刷業、紙器・型版製作
NN	単独	P町-A村	1960	高校中退	1978	BN氏	華人系列業者	200,000	1996	ペンダー一式	ペンダー一式、DCM	9	P町4(親族4)、ビコール5(彼らが親族)		紙器・型版製作
ON	単独	P町-S村	?	?	?	?	?	?	1978	印刷機、裁断機	?	41	P町8(親族含む)	1,000,000	印刷業、紙器・型版製作
FP	単独	P町-S村	1976	高校卒業	1994	母	イタリヤ在住	100,000	1999	ペンダー一式、DCM2、車	ペンダー一式、DCM2、車	2	S村1(親族)、バンガシナン1(妻親族)		紙器・型版製作
WS	単独	P町-S村	1965	専門短大卒業	1989	兄	紙器業経営	250,000	1993	?	?	12	P町2、ビコール8(妻同村)、ピサヤ2	440,000	シルクスクリーン
ES	単独	P町-S村	1958	専業	1980	姉	イタリヤ在住	160,000	1989	ペンダー一式	ペンダー一式	5	P町2(親族)、ダバオ1、不明2	200,000	印刷業、紙器・型版製作
DS	単独	P町-S村	1969	大学中退	1980	姉妹2、兄+BN氏+銀行業者	イタリヤ在住+華人系列業者	120,000	1996	ペンダー一式	ペンダー一式、DCM2、車	3	ビコール2、サマール1	30,000	紙器・型版製作
JV	単独	P町-B村	1950	高校卒業	1970	自己資金+LL氏	印刷業者	?	1983	DCM	DCM9、車、他不明	21	P町7(親族含む)、イサベラ(妻親族)(すべてイロコス)	950,000	印刷業、紙器・型版製作
NS	単独	P町-S村	1958	専門短大卒業	1979	NameUK+妻祖父	華人系業者+ハワイ在住	?	1986	ペンダー一式	ペンダー一式、車	40	4人以外はすべてイロコス出身		印刷業、紙器・型版製作
RV	単独	P町-M村	1960	大学中退	1984	AT氏+兄	印刷業者+紙器業経営	?	1994	DCM	DCM2、車、オフセット	6	バンガシナン1、イサベラ1、イロコス1、P町2(親族)	200,000	印刷業、紙器製作
RP	単独	P町-S村	1974	高校卒業	1991	母	イタリヤ在住	20000(機種所有済)	1999	ペンダー一式、DCM2、車	ペンダー一式、DCM2、車	3	バンガシナン1、S村2(親族)	36,000	紙器・型版製作
EC	共同	S町	1970	専門短大卒業	1987	オジ	カリフォルニア在住	1,000,000	2000	ペンダー一式	ペンダー一式、DCM、車	6	バンガシナン1(親族)、S町5(親族含む)	50,000	紙器・型版製作
PS	単独	P町-M村	1948	小学校卒業	1978	自己資金	コピー業者から紙器業に進出	?	1981	?	ペンダー一式3、DCM3、車、他コピー機関係	15	1/2がP町(親族)、1/2がピサヤ		紙器・型版製作、コピー機販売保守
ED	単独	P町-G村	1954	大学中退	1977	自己資金	サウジアラビアで12年間働く	55,000	1993	ペンダー一式	ペンダー一式、DCM、車	6	P町(親族含む)	75,000	紙器・型版製作

注1: S町はP町の隣町であり、P町東部出身の先輩者MCの親族が多い

注2: 独立年は、現時点での経営形態が共同・単独を問わず、現時点の経営形態に至った年

注3: 機械所有は中心的なもののみ。ペンダー一式には、ペンダー一式に、電動糸鋸、電動鋸、研磨機などが含まれる。DCMとはDie Cutting Machine、オフセットとはオフセット印刷機。